

国語

注意

- 1 問題は **1** から **4** までで、18ページにわたって印刷してあります。
- 2 受検番号を、解答用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 3 答えは、全て解答用紙の決められた欄に記入しなさい。下書きは、問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 答えは、特別の指示のあるもののほかは、各問の「ア・イ・ウ・エ」のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、答えの欄に、その記号を記入しなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、**や**。**や**「**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 5 記号を書くときも、文字を書くときも、明確に書きなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを記入しなさい。
- 7 提出するのは、解答用紙だけです。

1

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書かいしよで書きなさい。

- (1) 市のチョウシヤを建て替える。
- (2) テンマドから月明かりが差し込む。
- (3) 昔からのデントウを守った製法が味の決め手だ。
- (4) セルフレジで商品をセイサンする。
- (5) 米をタワラに入れて保管する。
- (6) 校庭にはミキの太いケヤキが植わっていた。
- (7) 山々の木々が秋色にソまっっていく。
- (8) 自動車税は各都道府県にオサめる税金だ。
- (9) 周囲の意見にミミをカそうとしない。
- (10) ウレシイサんで友人とともに出かける。

2

次の各問に答えなさい。

〔問1〕左の漢字の○で囲まれた部分は楷書で書くと何画目か。

座

〔問2〕 熟語の構成には、同じような意味の漢字を重ねたもの、反対または対応を表す漢字を重ねたもの、上の漢字が下の漢字を修飾した<sup>ちゅうじやく</sup>もの、下の漢字が上の漢字の目的語・補語になっているもの、上の漢字が下の漢字を打ち消しているもの、上の漢字が主語で下の漢字が述語になっているものの六種類がある。次の熟語の構成のうち他の三つと異なっているのはどれか。

- ア 実行
- イ 既成
- ウ 予知
- エ 挑戦

〔問3〕 次の各文の――を付けたかたかなの部分に同じ漢字が当てはまるのはどれか。

- ア 会議ではイ論が続出した。
- イ 道路ヒヨウ識がより分かりやすいものに変更される。
- ウ 自動運転分野をヒヨウ的に技術開発が進められる。
- エ 簡タンに組み立てられた。
- イ 間違いをタン的に指摘された。
- エ 壁面を修フクする。
- イ 名画をフク製する。

〔問4〕 次のうちで送りがなの付け方として適切なのはどれか。

- ア 逃る
- イ 誤る
- ウ 施こす
- エ 耕やす

〔問5〕 次の各文の——を付けた「ない」のうち、品詞が他の三つと異なるのはどれか。

ア 出発まであまり時間がない。

イ 最後まで協力は惜しまない。

ウ ほめられて喜ばない人なんていない。

エ 続編が楽しみで発売日まで待てない。

〔問6〕 次の古文の一節を音読するとき、——を付けた箇所<sup>おほいどの</sup>の読み方として適切なのはどれか。

内より、大殿にまか<sup>おほいどの</sup>でたまへれば、例の、うるは<sup>おほいどの</sup>しうよそほしき御さま<sup>おほいどの</sup>にて、心うつくしき御けしきもなく苦しければ  
〔『源氏物語』「紅葉賀」〕

ア ウルワシウ

イ ウルハシウ

ウ ウルワシユウ

エ ウルハシユウ

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

夏休み一週間前、どこかふわついた雰囲気<sup>ふんいき</sup>が漂<sup>なまよ</sup>う放課後。机の上に置かれた一枚の紙を、夏佳<sup>なつが</sup>はじつと見つめている。

進路調査票。

終礼でそんなものが配られた。どの高校へ通うか、第三希望まで書いて提出しろということらしい。期限は九月末なので時間の猶予<sup>ゆうよ</sup>はあるが、そうはいつでも気が重い。そもそもこの町の周辺にどんな高校があるのか、夏佳はあまり分かっていない。どの高校の名前を書いたところで意味がないように思える。

どこへ行つても水泳を続けるだけだった。

「夏佳、どうする？」

「おあ」

隣に秋穂が立っていた。驚いた夏佳を、秋穂が「変な声」と笑う。秋穂も進路調査票を持っていて、それをぴらぴら揺らしている。「どの高校書く？ 私も夏佳と同じ高校の名前書いておこうと思つて」

投げやりに言うので、夏佳は「そんな適当でいいの？」と笑う。すると秋穂は胸を張る。

「いいよいいよ。夏の後ろを秋が追う、それが大事だから」

「また言つてる」

(1) いつもの台詞に夏佳は呆れるが、秋穂はそれをよそに続けた。

「それに、私は大学で東京に行ければそれでいいから」

「東京？ 何で？」

「だって、東京つてキラキラしてるじゃん。色んな人がいて、それぞれが自分らしく生きていて、自信を持っている」

秋穂は胸を張っていた。が、夏佳には東京がそんな理想郷のようなどころだとは到底思えない。

「……今も秋穂はキラキラしてるよ」

夏佳は呟く。教室で人を引きつける秋穂は、夏佳から見ればよほど眩しい存在だった。そんな彼女が自分に話しかけてくるのはほとんど奇跡に思える。

「え、照れるよお」

秋穂が夏佳を進路調査票でべしべしと叩く。これは鬱陶しい。夏佳はその打撃を払い除け、「でも」と続ける。

「東京、そんなにいい場所じゃないよ」

「そんなことない、こことは全然違うから。私は将来、東京でとんでもないものに出会って、波瀾の人生を展開するんだよ」

自信の根拠が夏佳には分からないが、余計なことを言っても角が立つのでとりあえず頷いた。その自信が少し羨ましかった。

「じゃあ、東京に行くまでの間は何するの？ それまでの時間もつたいたい」

(2) 夏佳の言葉に、秋穂がきよんとした。

「え、うーん、全力で楽しむとかじゃない？ もつたいたいなんて考えたことないよ」

秋穂は首を傾げる。銜いのない表情。そこには恐れが全くなくて、夏佳の心がざわざわ震えた。

頭の中で二十五メートルプールの水面が揺れている。夏佳はその間を往復する。何かに焦り、このままではいけないと泳ぎを繰

り返すが、傍から見ればそのプールからは出られないままだ。ふと泳ぐのを止めてプールに足を付けたとき、その横を秋穂が走り抜ける。学校指定の青いリュックを背負い、軽やかな足取りのまま、プールから遠ざかっていく。

その想像の中でも、秋穂はにっこり笑っていた。自分は何に囚われているんだろう。

「……私は将来なんて分かんないや」

夏佳は匙を投げるように言い、席を立った。未来のことを考えてもお腹は膨れないし、何かが変わる訳でもない。

「今日も自主練？」

秋穂に尋ねられ、「そうだよ」と答える。声が暗くならないように気を付けた。

「偉いね、頑張れ」

「……ありがとう」

(3) 秋穂の言葉には何の棘もなくて、だからこそ自分が嫌になりそうだった。

職員室で鍵を受け取り、プールに向かう。更衣室で着替え、プールサイドに出てくると、先ほど脳内に浮かんだのと同じ水面が広がっている。

何かに負けそうになるが、ぐつと堪えて辺りを見回す。すると屋根付きのベンチにギターのケースが置かれている。十太はアンブを運ぶ途中だった。

あの日、十太が水の中へ飛び込んできた日以来、自主練のプールの定員が一人から二人に増えた。でもそれ以外に変わったことはなかった。夏佳はいつも通りの練習を今日も繰り返そうとしている。

「……やつほ」

ぎこちなく手を振ると、「おう」と頷きが返ってくる。それ以上、何か会話が続くこともない。夏佳は飛び込み台の方へ向かい、軽く準備運動を始める。

夏佳には大会が迫っていた。この地方の水泳連盟によるジュニア大会が今週末に開かれるのだ。中学生が出られるものとしては大きい部類に入った。実のところ、夏佳は大会が少し苦手だ。どうしても緊張してしまい、実力を出し切れたと心から思えるよう

な泳ぎを中々できないのだ。

その緊張をどう扱っていいか分からないまま、今日も泳ぎを繰り返す。

夏佳が練習を始めると、十太もギターを弾き始めた。十太は定期的に新たな譜面ふめんを持ち込み、違う曲を習得しているようだった。夏佳はその演奏をBGMにしながらい泳いでいく。

互いがそれぞれ集中し、自分の練習をする。本当にそれだけの時間だ。

やがて、十太があるフレーズを弾き始めた。お気に入りの曲なのか、十太は練習のたびにこれを弾いていた。耳残りのいい、どこか切ない音のまとまり。

夏佳が泳ぎに集中すると、特定の何かを考えるのは難しくなる。意識が体に向くことで、頭の中が空白地帯になっている。そこへ臙げおぼろに流れ込むのがこのフレーズだった。夏佳はそれを聞くでもなく、ただただ薄らうすと感じている。透明な夢を見るような心地。十太は同じフレーズを何度も繰り返し返す。そこに迷いはないように思える。夏佳は音に耽溺たんてきする十太が羨ましかった。十太は何かを強く信じていて、そこに疑問などないのだろう。

練習に一段落をつけ、プールから上がる。すると、ベンチにいる十太は演奏を止めて手元を凝視ぎょうししている。どうしたのかと思っ  
て近くへ行くと、十太はギターを肩から提(b)げたまま、手元にラジオを持っていた。だが、そこから鳴るのはノイズだけだ。

「それ、どうしたの？」

「ラジオ」

「それは見れば分かるけど」

夏佳はかくりと肩を落とす。そういうことじゃない。

「何でラジオなんて持ってきたの？ しかも周波数合っていないし」

「……最近、この周波数の辺りで変な電波を拾うんだ」

「変な電波？」

夏佳は首を傾げた。十太はラジオに視線を落として話し続ける。

「FMラジオなんだけど、喋りしゃべりも広告もなしで、ひたすら音楽が流れてるだけ。そんな放送が数時間続いている」  
「な、何それ」

ラジオに疎い夏佳に詳細は分からないが、確かに妙な番組だ。ノイズを垂れ流すラジオに思わず目をやる。十太も同じところを見つめている。

「……でも、どれもいい曲なんだ。細かく色んな音が入っていて、新しい。どれもすつごくセンスがいい」  
その言葉は静かに興奮を帯びている。どうしたらこんな風に夢中になれるんだっけ。

「電波が入ったら聴かせてあげるよ」

十太と目が合う。夏佳は何故か物悲しくなって呟く。

「楽しそうだね」

自分の冷たい声に驚き、すぐに後悔した。こんな口調で話すつもりはなかった。十太が何かを汲み取ったのか、少しだけ視線を彷徨わせると、また夏佳に目を合わせる。

「夏佳は水泳、楽しい？」

十太はこちらを向いていたのに、まるで海を眺めているような遠い目をしていて。

楽しいよ。

そう口にしようとして言葉に詰まる。浅い呼吸に呑み込まれる。

何か言わなければいけないのに何も言えない。楽しいと言うだけでいいのに。

グラウンドから跳ねるような声が聞こえた。フェンス越しに目をやると、野球部員の男子が陸上部員の女子にホースの水でちよつかいを掛けていた。グラウンドの水撒きに乗じて四、五人がはしゃいでいる。

プールサイドの視線に気付き、陸上部の女子の一人がこちらへ手を振った。秋穂だった。

楽しそう。

また冷めた感情が湧く。そんな自分に驚き、慌てて手を振り返す。秋穂は夏佳の反応に満足したのか、こちらへ背を向けて野球部の男子を追い駆ける。

「……楽しいとか、分かんないよ」

気付けばそんなことを口にしていて。

「私は楽しいから泳いでいるんじゃない。オリンピック中継で観た選手に憧れたの。あんな風に泳ぎたいから、あんな場所で泳ぎ

たいから、今も泳いでる」

夏佳にとつて、将来は今と地続きだった。どうしても辿り着きたい未来があつて、それに向かつて藻掻かなければいけない。そう思い続けて今日まで泳いできた。

「私が泳いでいる間に、みんなは友達とじゃれて、はしゃいで、笑ってる。でも私はそういうやり方が分かんないんだよ。憧れを叶えるために、泳ぐことしかできない。……いや、憧れを叶えるためなのかすら、あんまり分かつてない」

あのオリンピック選手の姿をいつでも容易く思い出せる。水と溶け合うようにしてぐんぐんと泳ぎ進める彼女がいつまでも脳裏にいる。でも、彼女のように全然泳げない。その姿はあまりに遠い。

水泳に打ち込めば打ち込むほど、クラスメイトとの距離は離れていく。けれど、脳裏で泳ぐ選手にもまるで追いつけない。それなのにどうして泳いでいるんだろう。自分で望んで泳いでいるはずなのに、惨めさが拭えない。

思考が渦を巻きながら沈んでいく。夏佳が俯いたとき、十太が口を開いた。

「海は好き？」

「え？」

十太はフェンスに手を掛け、遠くを眺めている。高台の下に広がる小さな町。真つ青な空と、さらに青い海。薄く広くどこまでも漂う潮の匂い。引つ越してきて一年数か月、未だに鼻がつんとする。

「……あんまり好きじゃない。泳ぐと肌が痛いし、しょっぱい。潮風も何だか慣れない」

正直に答えた。

「そっか」

十太は夏佳の答えには興味が無いように見える。何で突然そんなことを聞いたんだろうと首を傾げていると、十太が呟く。

「俺、波が好き」

「波？」

「うん。波は何度も打ち寄せる。それが好き」

十太はフェンスから離れ、ベンチに腰掛ける。ギターを構え、先ほどのフレーズをまた弾く。

(青羽悠「凧に溺れる」による)

〔注〕 銜てらいのない——わざとらしきがない。

耽溺たんでき——夢中になって、他のことを顧かまみないこと。

〔問1〕 本文中の——を付けた(a)と(c)の漢字の読みを書きなさい。

- (a) 到底 (b) 提ひげた (c) 口調

〔問2〕<sup>(1)</sup> いつもの台詞せりふに夏佳あきは呆あきれるが、秋穂はそれをよそに続けた。とあるが、ここでいう「それをよそに続けた」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 夏佳の反応に驚いて話をそらした  
イ 夏佳の反応に勢いきいづいて話をした

ウ 夏佳の反応に気付かず話を急いだ

エ 夏佳の反応に構わずに話を進めた

〔問3〕<sup>(2)</sup> 夏佳の言葉に、秋穂がきよとんとした。とあるが、この表現から読み取れる「秋穂」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 良き理解者であると信じていた夏佳が将来のことについて厳しい口調で質問してきたので、どのようになだめたらよいか分からずに立ち尽くしている様子。

イ 同じ考えを持っていると確信していた夏佳が将来のことについて全く異なることを考えていたので、どのように話を合あわせたらいいか分からずにとぼけている様子。

ウ いつも軽口をたたき合っていた夏佳が将来のことについて思いがけないことを言ってきたので、どのように返答したらよいか分からずに戸惑こまっている様子。

エ 真面目な話題に触れることをさけてきた夏佳が将来のことについて正面から聞いてきたので、どのようにあしらったらよいか分からずに必死に考え込んでいる様子。

〔問4〕<sup>(3)</sup> 秋穂の言葉には何の棘とげもなくて、だからこそ自分が嫌になりそうだった。とあるが、「嫌になりそうだった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 調子のいい言葉で機嫌を取ろうとする秋穂の軽薄な態度に接していると、将来のことを一生懸命考えようとする自分の熱意が空虚なもののように思えてくるから。

イ 心にもない言葉で励まそうとする秋穂の浅はかな態度に接していると、他人の言葉にすっかり耳を傾けてきた自分の力が無意味なもののように思えてくるから。

ウ 裏表のない言葉で応援しようとする秋穂の素直な態度に接していると、正直な気持ちを表に出すことのできない自分の性格がつまらないもののように思えてくるから。

エ 易しい言葉で根気強く話そうとする秋穂の誠実な態度に接していると、言葉を選ばずに思うがままに発言してしまう自分の言動が未熟なもののように思えてくるから。

〔問5〕<sup>(4)</sup> 夏佳はそれを聞くでもなく、ただただ薄らうすらと感じている。とあるが、この表現から読み取れる「夏佳」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア ジュニア大会が迫る中で水泳を続けることに対する不安は尽きないが、十太のギターの演奏をかすかに意識しながら余計なことまで考えずに練習に没頭することができている様子。

イ ジュニア大会が迫る中で将来に対する漠然ぼくぜんとした迷いを感じていたが、十太のギターが奏かなでる切なくも魅力的な新曲に強く背中を押されて泳ぐことを楽しむことができている様子。

ウ ジュニア大会が迫る中で弱点を克服こくふくするためのアイデアはなかなか思い浮かばないが、悩みつつもギターを練習する十太の姿勢に感化されて水泳に打ち込むことができている様子。

エ ジュニア大会が迫る中であまり準備が進まない日々が続いていたが、十太のギターの演奏を繰り返し聴いているうちに次第に緊張がほぐれてきて満足のいく練習ができている様子。

〔問6〕<sup>(5)</sup> 夏佳が俯いたとき、十太が口を開いた。とあるが、「俯いた」ときの「夏佳」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア クラスメイトとの付き合いをあきらめて退路を断つてひたすら水泳だけに打ち込んできたものの、結局は中途半端な成績しか残すことができないと自分の才能を見限っている。

イ オリンピック選手になりたいという強い思いで水泳を始めてはみたものの、友人たちと疎遠になる中で少しずつ過去の決断が間違っていたと考え始める自分に腹が立っている。

ウ テレビで観た選手たちのようになるために苦しい練習も一人で耐え抜いてきたが、いつの間にか目標を見失っていることに気付いて新しい環境で出直すことを決意している。

エ オリンピック出場という夢を実現するために同級生と過ごす時間を削ってまで水泳に向き合ってきたが、思うような成果も出ずに悪い想像にばかり囚われて落ち込んでいる。

〔問7〕<sup>(6)</sup> 高台の下に広がる小さな町。真つ青な空と、さらに青い海。薄く広くどこまでも漂う潮の匂い。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア プールから見える景色について暗い色味を強調することで、不安定な夏佳の気持ちに重なるように表現している。

イ プールから見える景色について色や匂いを用いて感覚的に述べることで、海に近い町の情景を鮮明に表現している。

ウ プールから見える景色について町と海との位置関係を説明することで、学校の立地を分かりやすく表現している。

エ プールから見える景色について空と海に限定して述べることで、自然豊かな町であることを間接的に表現している。

#### 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

社会の\*パラダイムの転換とともに人々のライフスタイルが変革され、それに応じて都市はその形態や構造を変容させてきた。農耕社会から工業社会への産業構造の転換、人馬の時代から鉄道や自動車の時代への移動手段の転換、情報社会の到来によるグローバル化などを挙げることができる。（第一段）

わが国に目を向けると、明治以降は欧米の文化や技術が流入し、その後も震災や戦争を経て、都市の姿は大きく変わってきた。1960年代の高度成長によって、資本と労働力が都市に集中し、地価高騰や環境悪化を招き、人口は郊外へと移動した。これにより職住分離のライフスタイルが生まれた。高度成長とともにモータリゼーションも進展すると交通問題が顕在化し、車社会に対

応した道路網の整備が進んだ。地方都市では家用車の普及が公共交通の経営を圧迫し、路面電車や路線バスの廃止が相次いだ。人口の郊外化とともに、自動車でアクセスしやすく広大な駐車場を完備した郊外のロードサイドショップやショッピングセンターが発展し、自動車でアクセスしにくい中心市街地の商店街は衰退した。情報社会が到来し、電子商取引（EC）の普及によって、買物物は自宅にいながら済ませることも可能となった。モータリゼーションによって従来の零細商店を駆逐してきた大型ショッピングセンターも、現在はECの脅威にさらされ、その持続可能性に疑義が生じている。（第二段）

現在、わが国は世界でも経験したことのない人口減少社会を迎えている。これまでのような経済発展を前提とした都市経営は成り立たない。モータリゼーションによって郊外に無秩序に開発された住宅団地群は住民の高齢化に悩まされ、空き家問題も深刻となっている。都市5・0時代における都市構造と人々のライフスタイルはどのようなものだろうか。（第三段）

現在わが国で議論されている未来都市の姿として、「コンパクトシティ」の概念がある。<sup>(1)</sup>コンパクトシティという発想は、人口減少に起因する多くの問題、商空間や住空間の空洞化による経済活動の停滞問題、税収減少によるインフラを含む公共サービスの維持困難問題など、経済効率性を踏まえた議論である。（第四段）

しかし、デジタルテクノロジーが発達することで、その大部分がカバーできる可能性があることを想定すると、このまま提唱どおりコンパクトシティが進展するかどうかは疑わしい。たとえば高齢者は買物をしたり、医療サービスを受けたりするうえで制約が多いが、ECのさらなる発達と、ITリテラシーを有した世代が高齢世代となることにともない、買物問題は解消され、自動運転に代表される次世代モビリティの発達により、たとえ高齢者であっても移動の選択肢が増えることが予想される。医療サービスもIT活用による遠隔医療の利用可能性もある。（第五段）

コンパクトシティという考え方はわが国の社会構造から考えると最適解かもしれないが、土地に対する愛着の強いわが国において、スムーズに実現するとは考えにくい。（第六段）

一方、「スマートシティ」という言葉は早くからもてはやされ、今も議論されているが、それはIoTやAIを活用した効率性や利便性の観点で語られる場合が多い。Society 5.0はこの延長上にあり、効率化・省力化だけでなく新たな価値創造にも重きが置かれているが、人間中心デザインやコミュニティの観点では十分な議論がなされているとはいえない。（第七段）

経済的合理性が最優先された都市4・0を超えて、情報技術の発展とともにつくられるべき都市5・0の姿はどのようなものだろうか。Maasの概念に代表される次世代モビリティによって人々の移動は現在よりもより自由になるはずであるが、デジタ

ルテクノロジーの発達によって通勤や買い物のためにわざわざ外出する必要性が生じなくなる。次世代モビリティを活用して未来の都市生活者は何をしに、どこへ行くのかといえば、デジタルツールでは得られない体験が味わえる地域固有の個性や人との出会いを求めて出かけていくのではないだろうか。(第八段)

未来都市は、かつて見られた人々が集い交わる生き生きとした人間中心のコミュニティ社会へ回帰するであろう。具体的には、都市生活者を支援するテクノロジーによって、住・働・遊の境界が曖昧になり、近づいていく。その結果、これまで以上に幅広い人々が出会い、豊かなコミュニケーションが形成される。都市デザインはそれを支援するものでなければならない。(第九段)

産業構造の転換を経て、都市生活者のライフスタイルは職住近接から職住分離に変化した。未来都市では情報技術などの発達によって、再び職住近接ないし職住同化に回帰するのではないだろうか。職住近接となり、街には散歩する人、友人に会いに来る人、買い物をする人、観光する人、リモートワークに励む人など、目的の異なる人が混在した「ミクストユース」の都市空間が出現するだろう。東京の街でいえば、渋谷は少なかつたオフィス床を増やして商業中心の街から脱却し、競争力を高めようとしているし、ほぼオフィスのみの街であった丸の内は、仲通りに商業機能を誘致して休日にも賑わいを生むことに成功した。六本木は、複数の大型再開発によってオフィスや商業やアートを含む娯楽機能が加わり、多面的な性格を帯びるようになった。しかし、これらのミクストユースは、地域や街区の中にオフィスの箱や店舗の箱が個別に混在しているにすぎず、空間的には隔離されている。<sup>\*</sup>DXを経た都市は、複数の用途が空間的にも同化することが考えられる。用途の混在が発展し、商業空間でもあるが仕事もできるし、人と憩うこともできる。それでいて自宅のような落ち着いた時間が過ごせる、都市のリビングのような空間が、公地・民地を問わず都市全体に広がりをもせるだろうことが望ましいのではないか。(第十段)

今後、都市のキャラクターはグローバル化とローカル化に二極化するのではないだろうか。東京でいえば、新宿などのターミナルシティや、渋谷や銀座などの超広域集客型市街地は、国際都市として現在以上にグローバル化すると考えられ、これらと近隣型商店街の中間的存在の吉祥寺、下北沢、自由が丘のような集客市街地は、その商圏がより小さくなってローカル化し、近隣型商店街に近づいていくのではないか。現在の商業規模を維持するためには、周辺人口を増加させて地域経済を維持することが必要となる。そして現在の地域密着の近隣型商店街はさらにローカル化を強めるだろう。ECやショッピングセンターの影響を受けない業種が生き残り、それ以外の業種は淘汰される可能性があるが、地域住民の緩やかなコミュニティの場として再構築されることで生き残ることができると考えられる。コンパクトシティ施策の推進によって、人口は一定の集約化は進むが、必ずしも利便性の高

い交通結節点に集約されるわけではなく、都市環境の豊かなエリアに集まり、現在のパワーバランスが変わる可能性がある。それは、適度な都市の空隙くうげきを含んだ多核分散型の都市構造となるだろう。人口減少によって都市が縮退していく中でも悲観するべきではない。量（＝規模としての都市）は縮小するが質（＝そこでの体験や出会い）を豊かなものにしていくことで、その街に愛着が生まれ、結果として持続可能な都市が生まれる。その鍵となるのが人間中心のデザインである。（第十一 段）

デジタルテクノロジーを活用することで人間が現在のさまざまな制約から解放され、前述のような未来都市が実現したとしても、それは都市という器ができるにすぎない。そこに生き生きした人間の活動が生まれて真のDX、すなわち人間中心都市が実現する。都市にオープンスペースを設けただけでは生き生きした人間の活動は生まれない。大切なのはコミュニティの創造である。人口減少や高齢化によって従来の地縁型コミュニティは衰退している。一方で、NPOや民間企業や教育機関などを含む主体横断型の新しいコミュニティが出現し、街づくりの担い手として力を発揮しはじめた。さらに「ICT」によってSNSなどの仮想空間でのコミュニティも生まれている。これらの新しいコミュニティの構成員は必ずしも居住者とは限らない。近年注目されているのは「関係人口」という概念である。関係人口とは、「定住人口」でもなく、観光にきた「交流人口」でもない。地域や地域の人々と多様に関わる人々のことを指す。地域に深く関与していたり、関与したいと思っている、非居住ながらその地域に強い愛着を持つファンのような存在である。それはその地域で働く人や学ぶ人もかもしれないし、通い詰めるお店がある人もかもしれない。<sup>(4)</sup>国土交通省の報告書では、地域の街づくりの担い手になる人を「活動人口」と呼ぶなら、定住人口の中の活動人口比率を高めるだけでなく、関係人口の中に活動人口を求めることも、人口減少社会の中では重要であると指摘している。（第十二 段）

定住人口が減少しても活動人口を維持拡大することで街は生き生きする。関係人口はこれまで人口減少社会の中での地域再生の文脈で語られることが多かったが、未来都市における人間中心都市の実現においても重要な役割を果たすと考えられる。関係人口を増やすためには、居住者だけで閉じることなく外に開かれた緩やかなコミュニティの受け皿をつくるのが肝要で、その受け皿の一つとして多様な人々が集まることができる「場」づくりが求められる。このような「場」は、空虚なオープンスペースでは成立せず、人々のニーズを満たす「機能」と、人々をつなげる「仕組み」が必要であると、前出の国土交通省の報告書は指摘している。（第十三 段）

人が街を選択する物差しが転換する中で、地域の活動人口を増やすためには、人を惹きつけるその地域にしかない個性「ならでは」を育てていくことが重要である。地域の「ならでは」は、その地域に対する愛着や誇り、「シビックプライド」につながり、

定住人口と関係人口の増加にもつながる。シビックプライドを醸成<sup>じょうせい</sup>するためには、市民一人ひとりが地域社会に積極的に関与することが大切である。<sup>(5)</sup> 街を消費するのではなく、ともに育ててゆくことで、市民にとってその街が特別な存在となる。<sup>(第十四段)</sup>

市民のアクションがシビックプライドの醸成につながった例は多い。たとえば、わが国一の繁華街<sup>はんかがい</sup>として知られる東京都中央区銀座地区には、市民が考える「銀座らしさ」を守るための「銀座ルール」が存在する。新規出店者やビルの建て主に、ルールへの理解を求め街の景観を守っている。東京都目黒区自由が丘地区は、地区南側を流れている九品仏川<sup>くほんぶつ</sup>が1974年に暗渠化<sup>あんきょか</sup>され緑道として整備された際に、その場所が放置自転車<sup>おほ</sup>で覆い尽くされてしまった。それを、地域住民らが自己負担で自治体の管理地である緑道にベンチを設置して、自転車の放置を解消することに成功した。近年注目されている「戦略的都市計画」の先駆け<sup>さきがけ</sup>ともいえる取り組みにより、質の高い滞留空間<sup>たいりゅうくわん</sup>を市民の力で創出した実績を持つ。現在では九品仏川緑道は地区を代表する都市景観となっており、市民の誇りとなっている。<sup>(第十五段)</sup>

効率重視の都市がグローバル化する中で、いかにローカルティを生み出すかが、シビックプライドの醸成やコミュニティの創造には不可欠である。公園や緑地などの自然環境資源、老舗<sup>らひせ</sup>や繁盛店<sup>はんじょうてん</sup>などの商業環境資源、居住者と関係人口を含む非居住者が交流する緩やかなコミュニティの存在、地域通貨の運用などのローカルシステムの構築など、地域の「ならでは」を探し育てていく取り組みは、都市5・0時代において、人々に選ばれる街になるための重要な要素といえるだろう。それぞれの地域が都市国家のよ<sup>よ</sup>うな独自性と個性を持つことで、人間中心都市が実現する。<sup>(第十六段)</sup>

(末繁雄一「魅力ある都市の未来像」による)

〔注〕パラダイム——ある時代や分野において人々が共有するものの見方や考え方の枠組み<sup>わくぐみ</sup>。

都市5・0時代——人間中心にデザインされた都市の時代。

デジタルテクノロジー——情報技術、情報通信技術、人工知能、ビッグデータなどのデジタル技術の総称<sup>そうしょう</sup>。

ITリテラシー——IT（情報技術）を使いこなす能力。

スマートシティ——情報技術などの先端技術を駆使<sup>くし</sup>して効率的に運営管理する環境配慮型都市<sup>はいいりよがた</sup>。

IOT——情報通信機器だけでなくさまざまな物をインターネットにつながるようにすること。

Society 5.0——デジタルテクノロジーを最大限に活用して実現される未来社会。

MaaS——デジタルテクノロジーを用いた新たな移動サービスのこと。

DX——デジタル・トランスフォーメーションの略で、デジタルテクノロジーを活用して製品やサービス、ビジネスモデルなどを変革すること。

暗渠化——河川や水路を地中に埋設すること。

〔問1〕本文中の——を付けた(a)～(c)の漢字の読みを書きなさい。

- (a) 経<sub>レ</sub>て (b) 衰<sub>レ</sub>退 (c) 迎<sub>レ</sub>えて

〔問2〕この文章の構成からみた第三段の役割を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア それまでに述べてきた内容に対する反論を紹介することで論点を明確にしている。  
イ それまでに述べてきた内容を受けて問題を提示することで論の展開を図っている。  
ウ それまでに述べてきた内容を簡潔に整理することで論旨を理解しやすくしている。  
エ それまでに述べてきた内容についての具体例を列挙することで論を補強している。

〔問3〕<sup>(1)</sup>コンパクトシティという発想は、人口減少に起因する多くの問題、商空間や住空間の空洞化による経済活動の停滞問題、

税収減少によるインフラを含む公共サービスの維持困難問題など、経済効率性を踏まえた議論である。とあるが、ここでいう「踏まえた」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

- ア 克服した  
イ 疑問視した  
ウ 切り捨てた  
エ 念頭に置いた

〔問4〕<sup>(2)</sup>都市デザインはそれを支援するものでなければならない。とあるが、「それ」が指し示す内容を本文中の語句を用いて

四十字以内でまとめて答えなさい。

〔問5〕<sup>(3)</sup> 人口減少によって都市が縮退していく中でも悲観するべきではない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 人口減少によって、集客市街地は生き残り策としてのグローバル化による地域経済の維持を選択せざるを得ないにしても、外国人居住者の今後さらなる増加は確実なので、結果として持続可能な都市が生まれることになるから。

イ 人口減少によって、地域密着型の近隣型商店街は商業規模の縮小が避けられないが、もともとECやショッピングセンターの影響を受けない業種から構成されているので、結果として持続可能な都市が生まれることになるから。

ウ 人口減少によって、超広域集客型市街地以外の街は集客力が低下し商圏が小さくなるにしても、街が提供するさまざまな体験や出会いを豊かにすることで街への愛着も生まれ、結果として持続可能な都市が生まれることになるから。

エ 人口減少によって、都市はグローバル化とローカル化との二極化に進むことになるが、どちらの場合であっても交通の利便性が高ければ将来の街の人口増加は見込まれるので、結果として持続可能な都市が生まれることになるから。

〔問6〕<sup>(4)</sup> 国土交通省の報告書では、地域の街づくりの担い手になる人を「活動人口」と呼ぶなら、定住人口の中の活動人口比率を高めるだけでなく、関係人口の中に活動人口を求めることも、人口減少社会の中では重要であると指摘している。とあるが、ここでいう「関係人口の中に活動人口を求める」ことに当てはまるのは、次のうちではどれか。

ア 地域の街づくりの一環として行っている公園の美化活動に、休日を利用して公園にジョギングにくる他県在住の大学生らにもボランティアとして参加してもらっている。

イ 地域の街づくりの一環として行っている観光キャンペーンとして、城址公園を訪れた観光客に地域の特産品を紹介したパンフレットを配布し、地域振興に役立てている。

ウ 地域の街づくりの一環として行っている子どもキャンプ大会の運営補助を、地域に在住する高校生に広く呼びかけており、毎年十名前後の高校生が参加している。

エ 地域の街づくりの一環として行っている河川敷の清掃を地域の各町内会にお願いし、昨年は街づくりのすぐれた取り組みとしてテレビでも大きく取り上げられた。

〔問7〕<sup>(5)</sup> 街を消費するのではなく、ともに育ててゆくことで、市民にとってその街が特別な存在となる。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 街を利用する人々がその街で買い物を楽しみだけでなく、自己負担をいとわずにオープンスペースを提供するようにすれば、非居住者にとってもその街が地域住民と同じような愛着が持てる街になるということ。

イ 地域住民が街の資源が使い尽くされないためのルールを創り出し、その街を訪れる人たちに理解を求めることによって街が発展すれば、地域住民にとつてその街が人々から選ばれる住みよい街になるということ。

ウ 地域住民が互いに協力し合つてその街にしかない「機能」と「仕組み」を探し出し、人を惹きつける質の高い街づくりに成功することによって、地域住民にとつてその街が独自の実績を持つ街になるということ。

エ 街を利用する人々が街の提供するさまざまなサービスを受けるだけではなく、その街にしかない個性を共同で創出し積極的に関わることで、街を利用する人々にとつてその街が誇りの持てる街になるということ。